

トピックス

パネル討論「ITER 時代の幕開けと核融合エネルギー実現への"道"」（要旨）

松田:これからパネル討論を始めますが、時間があまりないので、会場からの質問に答えるかたちで進めたいと思います。

常松(会場から):下村さんへお尋ねします。もしあと5年長くITERに留まっていたら、何をやっておくべきとお考えでしょうか。

下村:1992年からITERに100%参加してきましたが、当初はITERの建設からファーストプラズマまでと考えていました。しかし、スケジュールが遅れ、これから10年に渡る建設を引き続きやるのは限界がありますので引退しましたが、もし5年若ければITERを続けたと思います。

松田:ITER計画の当初からプロジェクトに関わってこられた苦米地さんからコメントをお願いできますでしょうか。

苦米地(会場から):ITERが始まったころは東西冷戦のさなかで、正直なところ、米ソが協力して最先端科学技術の国際協力をやるなど常識では考えられませんでした。当時、プラズマを加熱するための中性粒子ビームはスターウオーズの兵器技術だったわけですから、大変苦労したことを覚えております。ところで、50年前の米国留学時代のことになりませんが、プロジェクトとは、ミッションの達成を、予定された資源で、予定された期間内でやることが重要で、このどれひとつ欠けても駄目だということを教えられました。ITERの概念設計を3年間でまとめましたが、当時は装置を建設するなど考えられませんでした。しかしその後ベルリンの壁が崩壊し、今ITERの建設が現実のものとなっています。1992年当時は、1998年から建設着工、2005年ころから運転開始という夢を抱いていました。今のITERスケジュールの遅れを見た米国の友人には冗談でしかられています。これからITERをやる人をお願いがあります。プロジェクトとは、予定の資源で、予定の期間内に目的を達成するものでなければなりません。そうでないと世界中から信用を失うこととなります。政治が関係すると大変だと思いますが、是非そういうふうにやっていただけるよう、国内機関であるJAEA、および産業界のご尽力をお願いいたします。

松田:今日のシンポジウムでは講演者の多くが「グローバルな視点で」と強調されました。それは環境問題との強いリンクが考えられるためです。CO2排出量におけるアジアの割合は今後大きくなります。従って、核融合技術でも日本が一人勝ちするような技術では意味はなく、誰もが使える技術であるべきで、他分野のモデルになりうるようにすべきと考えます。

山下:人材育成はどの分野でも大きなテーマです。アメリカの今後の原子力発電所建設は優秀なインド人技術者が担うと言われています。日本人研究者・技術者の転出や外国人研究者・技術者受入れと言った人材の交流が今後益々重要になると思います。ITERは人材流動をうまくやっていくべきだと思います。

下村:現在ITER機構に参加している日本人が少ない状況です。若い研究者が数年外国に武者修行に行くのは問題ありませんが、中堅以上では日本に帰ってきたときにポストがないという現状があります。これは、日本の開発・研究分野では人が移動しないのが常識になっているためです。人材の流動化を促すシステムを構築しそれが上手く

機能しないと、外に出て活動しようという人が出てこないのは当然ではないでしょうか。この点をぜひ改善してほしいと思います。これは、国内の研究の活性化にも役立つと思います。

佐藤: 人材がやせ細りつつあるというのが問題のひとつだと思います。この原因には、計画の遅れも絡んでいるかもしれません。このことは、本フォーラムが取り組むべき重要な活動課題です。今後いろいろな提案を行って、教育の現場につながる大学の先生や小中高の先生方などにも、活動の場を広げていかないといけないと考えております。